事例 2	コミュニケーションボードを活用した 言語の表出が苦手な児童への支援

総合支援学校　小学部 国　　語	キーワード●コミュニケーション支援　●発表する ●コミュニケーションボード　●読む、書く

「文を作ろう」

1　単元の学習

●単元目標

〇コミュニケーションボードを活用することを通して、ことばを広げたり、自分の思っていることを人に伝えたりすることができる。

●対応する学習指導要領の内容

教科・領域等	内　容　等
国語 （知的障害の児童を教育する場合）	・教師や友達などの話し言葉に慣れ、簡単な説明や話し掛けが分かる。 ・見聞きしたことなどを簡単な言葉で話す。
自立活動（コミュニケーション）	・言語の受容と表出に関すること。 ・コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。

2　指導略案

●単元指導計画

指導内容等	時間
①いろいろなコミュニケーションソフトウェアを使おう	３時間
②絵記号の意味を音声で聞こう	２時間
③コミュニケーションボードの使い方に慣れ、２語文を作ろう	５時間
④コミュニケーションボードを使って、３語～４語文を作ろう	（本時）６時間
⑤コミュニケーションボードを使って、会話をしよう	３時間

●本時の目標と展開

【目標】

〇絵記号の意味を理解し、文を作ることができる。

〇コミュニケーションボードを用いて、人とのやりとりを楽しむことができる。

【展開】

学習活動	教師の働きかけと指導上の留意点（情報機器・教材の活用）
①文の材料を選ぶ。	〇絵を見て、その名前をひらがなで選択させる。 ・絵記号はコミュニケーションボードの絵と同じものを用いることで絵記号の意味を理解し、活用しやすいようにする。 ・プレゼンテーションソフトウェアのアニメーション機能を用いることでゲーム性を持たせ、楽しく活動できるようにする。 ・読みが分からない場合､音声ボタンを押して聞こえるようにしておく。
②３～４語文を作る。	〇ビデオを視聴し、画面の動きを３～４語の文で表現させる。 ・事前に文が作りやすい動作を撮影しておく。 ・身近な教師や友人が登場することで、日常生活に近い雰囲気を出す。 ・作った文を教師が読むことで､絵記号やひらがなの読み方を確認する。 ・作った文とその動作の感想を「気持ちカード」で確認する。 ＜評価：知らなかった言葉に興味を抱くことができたか。＞

③文を作る。	○教師にやってもらいたいことを文で表現させる。 ・自分の要求が伝わった楽しさを本児が味わえるように、教師は要求に応じて大きな動作で行う。 ＜評価：教師に自分の思いを伝えようとしたか。＞
④自分の思いを伝える。	○他の教師に教室に来てもらい、自分の思いを伝える場を設定することで、伝わった喜びを感じさせる。 ＜評価：表現を工夫しながら、自発的に伝えることができたか。＞

3　展開の実際

【対象学年・児童生徒】

知的障害と肢体不自由のある小学部５年生で、日常生活においては、簡単な指示や会話を理解している。他者とのコミュニケーションについては、家でよく見ているテレビ番組や夕食の献立等を簡単なジェスチャーを使って身近な教師とやり取りをしている。

国語の学習では、学習内容に合わせて、集団で学習したり個別課題に取り組んだりしている。ひらがな５０音が理解できるよう繰り返し学習しており、文字カードを見て、同じ文字を正確に選ぶことができるようになった。

【コンピュータによる積極的な取組】

本児はコンピュータに強い興味があったこともあり、操作を早く覚え、タッチパッドを使ってポインタを上手に合わせることができた。また、プレゼンテーションソフトウェアを利用したクイズ形式の問題の提示や、アニメーション機能の活用により、積極的な授業への取り組みを促すことができた。

4　情報機器等の活用の工夫

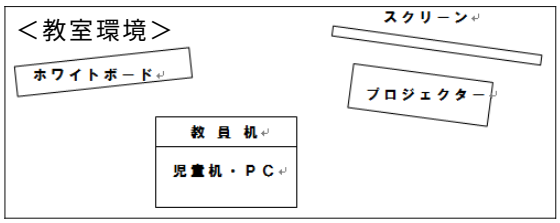
【多様なコミュニケーション手段の経験】

ＶＯＣＡ（※１）やコミュニケーションブックを用いた授業では、同じパターンの言葉を繰り返すことが多く、思いを十分に伝えることができなかった。コンピュータやコミュニケーションボードを併用することで、コミュニケーションに対する意欲を喚起することができると考えた。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾎﾞｰﾄﾞ＞

【情報機器等の活用環境】

○コミュニケーションボード
○コンピュータ（ＷｉｎｄｏｗｓＸＰ）
○プレゼンテーションソフトウェアで作成した教材
○プロジェクタ、スクリーン



【情報機器等の活用時の工夫】

○児童が使いやすいように、コミュニケーションボードの絵記号の大きさや色分け等を工夫する。
○絵記号は、「ＰＩＣＯＴコミュニケーションブック」（※２）を参考に作成する。

＜注＞（※１）（※２）については、資料編の用語解説を参照

5　情報機器等の活用の効果

【成果（本時の評価）】

コミュニケーションボードは紙媒体であるが、その使い方に慣れるために、さまざまな情報機器を補助的に活用した。会話の内容を広げ、学校生活で有効に活用できる語いの獲得・増加にもつながっている。授業では、文を作ると同時に自分の思いを表情や声に出して伝えようとする児童の姿がしばしば見られた。

また、興味のある絵記号とひらがなをつなげていくことで読字の力を伸ばしていくことができる。

【今後の課題】

ひらがなや言葉の理解を深めると同時に、ジェスチャーや絵カード、トーキングエイド等を用いてのコミュニケーション手段の拡大を図っていきたい。